

教養コース ④ 国際社会学

混迷の中東を読み解く

第三回

日本の中東外交

—日本の軍国主義化と中東外交の激変—

—講師 尾崎 芙紀氏—

日 時	2020年9月12日（土）10:00～12:00
場 所	鶴瀬公民館 第三集会室
講 師	尾崎 芙紀氏（中東研究者・日本 AALA 理事）
受講者数	24人

まず、先生がご自分の経歴を自己紹介されました。業界紙の記者。アラブ連盟事務所に勤務され、アラブの情勢を研究しえた環境にあったことなど。

前半は、先生が用意された資料①から⑥までを使用しての講義。



講師 尾崎 芙紀氏

資料①アラブ連盟加盟諸国と中東地域

1～2回の平井先生の「アラブとは何か」という基礎知識に付け加える形で講義がはじまりました。

先生の思いは「(受講生に) 中東の現場の動きを伝えたい」ということでした。

70～80年代、中東地域は世界最大の産油国で、日本、経済界は石油欲しさに事務所によく来ていた。しかし、現在は採掘方法の進化によってアメリカ、ロシア、カナダなどに地位を譲る状況になった。

資料②アラブ文化の遺産と「内部改革を目指して」

- ・ヨーロッパを通じて日本語に入ってきたアラビア語の多さに注目。
- ・アラブ・イスラム文化の歴史と西側の植民地支配

参考文献を参照、引用すると文化的、社会的に東西の文化を融合させて高度なイスラム文化を開花させた。ところが日本の明治期と同じく、自分の文化を遅れたものとし欧化することで追いつこうとした。

- ・ではなぜアラブは負けたのか
- ・内部改革を目指して

『アラブ人間開発報告』アラブ諸国の学者が、2002年～09年5回にわたって独力で作成した報告書。アメリカに利用されてイラク攻撃の合理化に悪用された。

資料③自衛隊のイラク派兵で聞こえた現地の声

「さらば、友好的な日本人」2004年アル・バヤーン the 宣言 保守系新聞

資料④パレスチナ占領地と近隣諸国

2017年 イスラエル統計局 分離壁（イスラエルが入植地という名の占領地を作り続けている。さらに分離壁でパレスチナ人に分断を強いている。）

資料⑤アラブ中東略年表（2020年8月13日現在）大変貴重です。

近年、安倍政権がイスラエルとの友好関係をすすめ、中東を外交対象から外そうとしているように見える。

資料⑥【共同声明】武器見本市なんかいない、どこにも

幕張メッセで開催される予定の国内外150社が出展する武器見本市に対し、市民による抗議行動があった。反対の共同声明の紹介。

休憩後、後半は、レジメに沿って講義がありました。

先生の言いたいこと

日本の軍国主義化が進んでいる。
中東の戦争を契機に日本は日米安保条約の下に1991年湾岸戦争をはじめ2003年イラク戦争な



ど、アメリカの中東政策に深く組み込まれてきた。資料⑥の略年表で確認をしてください。中東で最強の軍事大国イスラエルと防衛協力をうたい、軍事・経済協力を着々と進めている。アメリカのトランプ大統領の仲介でイスラエルとの国交正常化に走るアラブ首長国連邦（UAE）背景に何があるのか。今後の動きを見ていこう。

1. なぜ、中東は戦争が多いのか 西側諸国の植民地支配の歴史から

- (1) 西側諸国の植民地支配（19～20世紀）
- (2) パレスチナ問題とは 資料④地図、資料⑤年表参照

2. 中東情勢と日本の

- (1) アメリカの戦争に日本は同協力してきたか

1990年以降の中東地域の主な戦争と」日本の関与、軍拡中東はアメリカの二重基準の矛盾が集中的に表れているところである。

- (2) 薄れてきた日本への信頼

- (3) 日本の中東外交の激変とイスラエルとの軍事外交

・2014年5月に安倍首相、イスラエルと軍事交流などネタニアフ首相と関係強化で合意。かつて武力によるイスラエルの領土取得を批判し、パレスチナ自治権を支持していた日本の中東政策の180度転換である。

- ・イスラエルへの武器揺失と共同研究の試み
- ・「実戦経験のない日本の弱み」とイスラエル

2019年度の経団連防衛生産委員会総会で（2014年に大手軍需産業60社で構成）防衛産業の強化に努めていくと決意表明。

・2017年2月1日に、入植地問題を無視する日本とイスラエルの投資協定
投資協定で定義されるイスラエルの領土にパレスチナの日占領地が含まれる。国際社会はイスラエルの入植活動を非難。2016年末には国連安保理でも異例のイスラエル非難の決議がされた。

パレスチナ人にとってアメリカと「F16戦闘機やアパッチ・ヘリコプターだ。イスラエルが私たちが殺し、うちを破壊する兵器だ」アメリカ紙で報じられたが、日本もイスラエルと同じ立場に置かれることになる。

日本の軍事主義化を阻止するたたかいは、今なお自治権の実現に苦闘している中東地域の人々に、そしてパレスチナ人たちに私たちはどう向かい合っていけばよいのか。

多くの資料、レジメを説明・講義するには時間が十分ではなく、質疑の時間を取ることができなかった。

しかし講義終了後、熱心に質問をされる受講生がいました。

